

# 6 音 楽 科

川口万里・福田秀範

## 1 音楽科が育むもの

音楽科では、「生涯にわたって音楽に親しむ態度や意欲の育成」に重点を置いて、取り組みを行ってきている。特に「生涯にわたって」という視点を重要ととらえている。そこに、学校における音楽教育の必要性を見出すとともに、その意義を追究していく授業を行っていきたいと考える。すなわち、学校での音楽活動が「なんて音楽っていいんだろう。」と子どもたちが感じる土台となるような感動体験となり、それが、生涯にわたって音楽を楽しんでいける確かなものとなって、子どもたちの内面に培われていくような音楽科の授業をめざしていきたい。

## 2 音楽科でめざす「自立に向かう子ども」の姿

音楽科では「自立」を「自ら楽しく音楽に親しんでいる」姿ととらえ、具体的な子ども像を次のように考えた。生涯にわたって音楽に親しむ姿とは「楽しさ」の実感と「感動」の共有が重要と考えた。

- 自分で歌を歌うことや、楽器を演奏することに楽しさを実感できる子ども
  - 自分で音楽や音楽表現をつくる楽しさが実感できる子ども
  - ◎ 様々な音や音楽とのかかわりを楽しむ子ども
  - ◎ 音楽科で学習したことをもとに、生活の中で進んで音楽とかかわる子ども
  - ◎ 人と人とかかわりの中で音楽活動をすることにより、感動を共有できる子ども
- (◎は本年度の重点項目)

## 3 サブテーマ「人やものとかかわることを大切にしてい」るとのかかわり

「音を楽しむ」という音楽科ならではの活動が、子どもたちにとって非常に大切である。音楽のよさは、言葉では表せないような自分の伝えたいものを音に託し、相手に伝えられるということにある。それにはまず、音を大切にするという姿勢を身につけることが出発点となる。ここに、自分と音とのかかわりを深めていく必要性が見出せる。さらに音楽には、人と人が心をつなげて、集団で音楽表現を工夫することにより、一人では為し得ない大きな表現を創り上げ、感動を共有できるよさがある。音楽を媒介にした人と人のかかわりが生まれ、自己の存在の大切さに気づいたり、表現にかかわる責任感や連帯感、表現し終えた時の達成感、充実感などをともに味わうことができるような体験を大切にしていきたい。

このように音楽活動の楽しさが実感できたり、感動をともにすることができたりできる子どもを育てていくには、本校のサブテーマ「人やもの（音）とかかわることを大切に」した授業づくりが大きくかかわっている。そこで、「楽しさが実感できる」「感動をともにできる」という2面に焦点を当て、具体的な授業づくりに迫っていく。

## 4 「自立に向かう子ども」を育む授業の具現化

### (1) 楽しさが実感できる授業

様々な活動の場面で、子どもたちが「楽しい」と感じることができる授業にしていきたい。「楽しい」と感じている状況とは、子どもたちが、授業後まだやりたいという気持ちが

残っていたり、自分の力が発揮できたり、自分の考えていたとおりの表現ができたり、偶然に自分の思いに合う表現と出会ったり、ふりかえりの場で、次への課題がどんどんわいてくる、などが挙げられる。これらの具現化に向けた支援の方法として、次の点を大切にしていく。

- ・ 教材は子どもに愛好されるもので、しかも心情を揺り動かすような魅力のあるものを選択する。また、子どもの希望による曲も適宜取り上げるような柔軟性ももつ。
- ・ 学習過程は教師主導ではなく、音楽に向かっていく子どもの気持ちを大切に、それに沿った展開づくりを心がけていく。
- ・ 音楽に興味をもち、楽しむために必要な基礎的な能力（歌唱や器楽の表現技能など）の最低必要なことが、身につくようにする。

## (2) 感動をともにできる授業

音楽のよさは、何といても人や音とのかかわりを通して、感動を共有できるという点である。みんなで協力して音楽活動を行う過程では、自分の工夫が生かされたり、友だちの表現を鑑賞し、そのよさを感じたりして、お互いがめあてを共有し、表現を追究し、深めていくことが感動を味わえるきっかけとなる。そのために必要なこととして、次のことを大切にしていく。

- ・ 教材との出会い、人との出会いから生まれる感動体験を大切に、そこから自分の表現への意欲が高まり、追究の見通しがもてるようにする。
- ・ 学習のめあてを自分で決め、それに向かってじっくり取り組む時間や場を設定して、楽しく学習できるようにする。
- ・ 子どもの音楽へのイメージを大切に、それを自分で決めた様々な表現活動を通して、自己実現できるような場を設定し、達成への満足感がもてるようにしていく。
- ・ 自分で決めた表現活動などがより実現可能になる場として、同じ思いの子ども同士でのグループ学習を積極的に取り入れ、友だちと協力して表現することによって得られる感動を共有できるようにしていく。

## 5 総合的な学習とのかかわり

音楽科では、これまでに本校の総合的な学習との関連を図った授業を実践している。「人間」領域との関連を図り、「平和の歌」を実際に平和公園で自分の思いを込めて歌う活動に発展させた授業。「環境」領域と宿泊行事との関連を図り、5年「山の学習のテーマ」4年「海の学習のテーマ」を子どもたちとともに作詞・作曲する授業。低学年では「えんこう川」「元宇品」の自然体験から得た様々な音を身近な音素材で表現し、身近な人々に発表するという授業。「自分タイム」では、6年の沖縄旅の学習で、実際に三線等の琉球楽器にかかわった体験をもとに自分の研究をまとめるといった子どもが出てくるなど、音楽科の「琉球の音楽」の学習での経験を生かした追究活動をする子どもが増えてきた。

様々な体験を通して、自分が見たり、聞いたり、感じたりしたことを自分なりに表現できるようになることは、総合的な学習に取り組んでいくのに必要不可欠である。特に音楽科では、自分の思いを音や音楽で表現する力を育てたいと考えている。この表現力を高めていくには、表現の源となる自分の内面が豊かになっていくことが重要である。この自分の内面の耕しは、音楽科だけでなく、他教科・領域にわたる子どもの生活体験全てにかかわることである。本校で実践している総合的な学習は、直接体験を出発点として、そこから子どもたちがたくさんの感動体験を得て、内面を豊かにしていこうとしている。そこに音楽科が積極的にかかわっていくことで、より一層の表現力の広がり期待できると考えている。今後も研究実践を積み重ねていきたい。

## 6 成果と課題

### (1) 低学年

・「楽しさの実感」を重視し、昨年度に引き続き、遊びの要素を取り入れた授業実践を行った。本年度は、既成のあそび歌に、自分たちの生活体験を盛り込む創作活動を取り入れた。生活科を中心にした学習体験と音楽の授業とのかかわりにも観点を置いたことで、日常の遊びの中で、授業で学習したあそび歌を歌って遊ぶ姿が見られるようになり、学習したことが生活に生かされていく実像を伺うことができた。

・「楽しさ」のとらえ方を検討し、それに応じた授業における評価の方法を、さらに具体的に検討していきたい。遊びを取り入れた授業実践においては、「歌って遊んで、楽しかった」のか、遊びそのもののおもしろさから「遊んで、楽しかった」のか、など、いろいろな「楽しさ」が考えられた。

### (2) 中学年

・第4学年では、総合的な学習と関連して、「1/2成人物語」に取り組んだ。自分の思いをどう表現していくかという観点をもちながら、よりよい表現をめざして学習を進めることができた。また、その発表の場では、子どもたちは達成感や満足感を味わうことができ、感動するという体験ができた。このような総合的な音楽活動においては、基礎・基本の力が応用される場でもある。よりいっそう子どもたちの能力を生かし、引き出していけるような場を設定し、指導を工夫していきたい。

・中学年では、リコーダーを中心に、楽器の演奏技能面の基礎的な力を身につける取り組みを継続して行っている。また、歌のレパートリーをふやししながら、響き合う歌声づくりにも取り組んでいる。互いに演奏を聴き合う場や、一人で演奏する場をふやすことによって、よりよい音をめざして真剣に取り組む子がふえ、音楽の楽しみ方の質が高まってきたように思われる。今後は、じっくりと音と向き合って、よい響きを追求していく姿勢を大切にしていきたい。

### (3) 高学年

・第5学年では、体験をもとに自由な発想を生かして表現をつくっていく学習活動の場として、「夜から朝の様子を音楽で表そう」に取り組んだ。友だちと力を合わせて楽しみながら音と向き合う姿が見られた。一方で、曲の気分や特徴のとらえ方、各楽器の知識など、一人ひとりの基礎的な力の定着の差も見られた。今後も、よりいっそう基礎学力の定着を図っていき、一人ひとりのよさを生かせる学習活動の場を設定していきたい。

・第6学年では、共通教材の日本の季節の歌や日本の鑑賞教材を取り上げ、日本の伝統的な音楽の学習を年間を通して実施するようにした。尺八や琴の生の演奏にふれる機会にも恵まれ、そのよさを味わうことができた。

### (4) 全体

・音楽科における本校の考える基礎・基本を明らかにしていきたい。まずは、音楽科と生活科・総合的な学習との関連を図ったこれまでの授業実践を整理し、教育課程に系統的に示したい。例えば、学校行事や自然体験との関連を図った音づくりの学習で育てたい能力を、第1学年から第6学年まで通して整理する。そして、本校の地域性や人や自然とのかかわりを生かした総合的な音楽表現を充実させていきたい。

・「生活の中に音楽を生かそうとする心を育む音楽の学習」をめざして授業実践を行った。低学年では、日常的な遊びの中で遊び歌を歌う姿が、また中・高学年においては、学校行事等で積極的に学習した曲を取り入れて活動する姿が見られた。低・中・高学年において、生活の中に音楽を生かそうとする姿とはどのような姿なのかをさらに具体的に整理していき、さらなる実践を重ねていきたい。